

聖書：使徒 17：1～9

説教題：イエスという別の王

日時：2014年4月13日

今日の箇所にはテサロニケ宣教の様子が記されています。テサロニケはマケドニア地方の主都に当たる町でした。今日もギリシャの国の中ではアテネに次いで人口が多い町だそうです。この町には先のピリピと違って、ユダヤ人の会堂がありました。パウロはその会堂に入って、三つの安息日に渡って福音を語ったと記されています。

まず見て行きたいのは、そのパウロの宣教についてです。具体的に彼がどのように説教したのかは詳しく書かれていません。2節に「パウロはいつもしているように、会堂に入って」とありますから、ここでの説教はいつものユダヤ人の会堂における説教と基本的に同じだったでしょう。会堂におけるパウロの説教については、すでに13章に詳しく記されていました。ピシデヤのアンテオケにおける説教です。ですから今日の箇所でも詳しく繰り返されていないのだと思われます。ここではその中身が大まかにまとめられています。かえってこの要約の中に私たちはパウロの宣教の特徴を見ることができます。

その一つ目は、2節にありますように「聖書に基づいて彼らと論じた」ということです。これは当たり前のことと思われるかもしれませんが、必ずしもそうでないと言えます。しばしば説教と言いながら、その人の体験話、その人の思ったことや感じたこと、あるいは今日の流行、昨今の事件などについて長々と語る人がいます。「なかなか聖書の話が出てこない。もう30分も経っているのに。」と心配していると、最後の方に聖書の箇所を取って付けたように読んで終わりという説教を聞いたこともしばしばあります。しかし説教はやはり、聖書に基づいて語られるものでなくてはなりません。私たちは「聖書は私たちの信仰と生活の唯一の規範だ」と告白しています。ですから規範でないことの話や長々とするのはなく、規範である聖書から語らなければなりません。Ⅱテモテ3章16節：「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」

二つ目の特徴は、3節の「そして、キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを説明し、また論証して」ということです。「説明」とは、エマオ途上で主とお会いした二人の弟子が、後に振り返って「道々お話になっている間も、聖書を説明してくださいました間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか」と語った時の「説明」と同じ言葉です。そしてその箇所の新改訳の注に記されていますが、この言葉は直訳では「開く」という意味です。ですから「説明する」とは「聖書の意味を開く」ことです。またパウロは「論証」しました。確かにそれがそういう意味であることを証拠立てました。その説明と論証の中身は「キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならない」ということです。当時の人々が期待していた救い主のイメージは、力によってローマ帝国を投げ倒し、イスラエルを高く上げてくれる救い主というものでした。しかし聖書が預言して来た救い主は、苦しみを受け、死んで、よみがえる救い主です。こういうメシヤが私たち罪人の救いのためにはどうしても必要であり、神はそのような方を送ってくださると語って来られた。そのことを明らかにすることがパウロの説教の二つ目の特徴でした。

そして三つ目は、歴史に現れたイエスこそ、聖書が預言して来たキリストなのです、と示すことです。パウロはここで、イエス様の誕生、地上の生涯、十字架、復活、昇天、聖霊の注ぎについて語ったのでしょう。そしてこのイエスこそ聖書が約束して来た救い主なのであり、このイエス・キリストにこそ信頼せよ！と語ったのでしょう。このようにパウロの説教は聖書に基づき、聖書の意味を丁寧に説き明かし、イエス・キリストを指し示すというある意味で地道なものでした。ある人はパウロがしなかったこととして次のことをあげています。一つは人々を信仰に導くために強制的な方法を使わなかったということです。ある人は人を効果的に導くための秘訣はとにかく大声で語ることだと言います。内容はともかく、とにかく大きな声で力強く語ることが大事である、と。またパウロは脅すという方法も取っていません。人間的にプレッシャーをかけるようなことはしていません。また先の方があげているもう一つのパウロがしなかったことは、人々を楽しませる語り方をしていないということです。今日、その誘惑は非常に強い、特に福音派の間では、とその人は言います。すなわち説教や礼拝の娯楽化、エンターテインメント化です。パウロの説教は聖書に基づき、その意味を丁寧に説き明かし、何よりもキリストを指し示すというものでした。

その時に結果は導かれました。4節に「彼らのうちの幾人かはよくわかって、パウロとシラスに従った。」とあります。必ずしも皆ではありません。必ずしも多くないかもしれませんが、しかし幾人かはよく分かって信仰へ入ったのです。またユダヤ人は多くありませんでしたが、神を敬う異邦人は多く救われました。貴婦人たちも少なくありませんでした。このように神の方法に従って、神が導いて下さる結果こそを私たちは求めて行くべきです。

二つ目に見たいことは、信仰に入る人も与えられた一方、他方ではまたしても激しい迫害が起こったということです。5節：「ところが、ねたみにかられたユダヤ人は、町のならず者をかり集め、暴動を起こして町を騒がせ、またヤソンの家を襲い、ふたりを人々の前に引き出そうとして搜した。」 これまでも信じないユダヤ人が激しい反対活動を展開しましたが、このテサロニケでもそうでした。ならず者をかり集め、暴動を起こして町を騒がせるという不正な手段を使うことも厭いません。そしてヤソンの家を襲います。パウロたちはこの家に泊めてもらっていたのでしょう。しかしパウロたちは見つかりません。そこで彼らはヤソンと兄弟たちの幾人かを引っ張って行って、こう訴えます。6節後半：「世界中を騒がせて来た者たちが、ここにも入り込んでいます。」 そして7節では、このキリスト教の宣教師どもはカイザルに背く行ないをしている！と中傷します。これは信じないユダヤ人がこれまでも取って来た常套手段です。イエス様の時もそうでした。ユダヤ人たちはイエス様をねたんで最初は宗教的な見地から断罪しましたが、ローマに訴えるにあたっては、カイザルに税金を納めないとか、自分こそ王だと主張しているといったように、ローマに対する反逆罪にすり替えて訴えました。ここでもそうです。パウロたちは、「イエスという別の王がいる」という危険思想を宣伝していると訴えます。彼らのような反体制主義者を許していたら、世界は大変なことになると述べて、人々の不安をあおります。そこで彼らはヤソンと他の者たちから保証金を取った上で釈放したと9節にあります。これは二度とパウロたちを泊めないという約束を取りつけたという意味でしょう。こうしてパウロたちはこのテサロニケを出て行かなければならない状況に追い込まれ

たわけです。

このようにテサロニケでもパウロたちは大変な迫害を受けました。第一次伝道旅行のキプロス、アンテオケ、イコニオム、ルステラでもことごとく迫害されましたが、この第二次伝道旅行でも、ピリピに次いでこのテサロニケでもそうでした。改めてキリスト教宣教に迫害は付き物であるということを教えられます。14章22節：「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならぬ。」ですから、私たちが主を人々に伝える時、様々な反対や思わしくないことが起こっても驚くべきではありません。むしろそれは宣教に必ず伴うことです。そういう中で宣教は進められて来たのですし、これからもそうであるのが通常であることを改めて心に留めさせられるのです。

最後に、反対者たちの言葉にもう一度注目したいと思います。確かにそれは悪意からなされた不当な中傷の言葉ですが、興味深いことにそこにはいくらかの真理も含まれています。特にそれは7節の「彼らはみな、イエスという別の王がいると言っている！」という部分です。彼らがこう訴えられたのは、そう言われるようなある特徴的な主張あるいは生き方がそこにあったからに他なりません。イエス様もこのことで訴えられましたし、パウロたちもこのことで訴えられました。それなら、この主張は少し引っ込めた方が良いのではないかとも思われますが彼らはそうしません。なぜでしょうか。それはイエス・キリストこそ王の王、主の主であるという教えは、キリスト教の譲れない重要な真理だからです。もちろんクリスチャンはこの世の為政者や王を尊ぶべきです。1テモテ2章1節：「すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。」1ペテロ2章17節：「すべての人を敬いなさい。兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を尊びなさい。」しかし、これらの世の王とまことの王とは次元がそもそも異なります。そして私たちが考えるべきは、まことの王は私たちに何をしてくださったかということです。イエス・キリストという王は何と言っても、私たちその国民のために死んでくださった王です。その尊い命を投げ捨ててくださった王です。民のために王が命をささげるというのは、この世では考えられないことです。この世の多くの王は高い所に君臨して、民を仕えさせる存在です。イエス様も「この世の支配者たちは人々を支配し、彼らの上に権威を振るう」と言われました。しかしイエスという別の王は、何と王ご自身が仕えてくださるといふ王です。そして国民のすべての罪の代価をお一人の尊いのちを持って支払い切り、復活し、神の右に着座し、今や天においても地においても一切の権威が与えられた方となられた。この神がお立てになったまことの王は、この世の王とそもそも比較になりません。今やこの世界は王の王キリストが統治するキリストの御国となっているのであり、その御国はやがての主の再臨の日に見える形で最終的に完成されることとなります。

ですから私たちは目の前の王を尊びますが、もしその王が度を超えて何かを主張するなら、使徒たちが述べたように、「人に従うより、神に従うべきです」と言わなければなりません。そしてその告白のために仮に地上の命を狙われても、その主張をやめることはできません。なぜならイエス・キリストという王こそ、何にも勝って私たちが第一の愛と忠誠とをささげべきまことの王だからです。この方こそ、ご自身のいのちをもって私たちに恵みの支配へと導き入れ、また永遠の御国へと導き入れてくださるお方だからです。パウロたちはその王のしもべ

として生き、働いていました。当時のクリスチャンたちもそうでした。ですからこのように悪意をもって解釈され、批判されもしました。果たして私たちも、彼らのように主イエスを王と告白して、そのように生きている者たちでしょうか。

今週は受難週となります。この週、十字架についてくださるのは、弱い方ではありません。そこに向かって進まれるのは、私たちの王なるお方です。この後、エルサレム入城の時の賛美歌を歌います。まさにこの受難直前の日曜日に主はエルサレムに王として入って行かれました。ろばの子に乗って、低い王として。そして限りない価値を持つ尊い命をささげて、民の救いを勝ち取ってくださいます。私たちの王はこの世に来てくださり、ついに私たちの身代わりに十字架にかかるためにこの日、エルサレムまで進んでくださったことを感謝して、私たちはこの方こそを私たちのまことの王と告白し、この王に私たちの第一の愛と忠誠を尽くす歩みをささげて行きたい。私たちは主を王として従う者たちであると同時に、私たち一人一人も主にあつて王とされている者たちです。万人祭司、万人預言者であると同時に、万人王ともされています。しかしその王としての歩みは、この世の王のように上から力で治める仕方によるものではありません。万人王としての私たちの働きは、まことの王の支配を映し出すように、仕えることによって表わすべきものです。私たちはイエス・キリストこそまことの王であると告白しつつ、それぞれが遣わされるところで、このまことの王を映し出す歩みをささげることによって、恵み深いこの王の支配を人々に宣べ伝え、その御国のさらなる拡がりのために仕える歩みを導かれて行きたいと思えます。